

国際バカロレア (IB) 教育についての考察

— 各教員の専門・関心分野における教育との比較検討 —

太田 雅子¹⁾ 鈴木 光男¹⁾ 飯田 真也¹⁾ 福重 浩之¹⁾
和久田 佳代¹⁾ 二宮 貴之¹⁾ 細田 直哉¹⁾

1) 聖隷クリストファー大学

Consideration on International Baccalaureate Education — Comparison of each teacher's specialty / interest area and IB education —

Masako OTA¹⁾, Mitsuo SUZUKI¹⁾, Shinya IIDA¹⁾, Hiroyuki FUKUSHIGE¹⁾,
Kayo WAKUDA¹⁾, Takayuki NINOMIYA¹⁾, Naoya HOSODA¹⁾

抄録

聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科では、国際バカロレア教員認定資格 (IBEC) のプログラムを 2021 年 9 月から開始する。それに伴い、IBEC の具体的な中身の検討を行うため、学科の各教員が専門や関心領域と関連づけて研究・研修を行って来た。そこから得た国際バカロレア教育に関する理解や考察について各執筆者が以下の内容についてまとめる。聖書・キリスト教的価値観と国際バカロレア、SDGs との関連、初等教育プログラムにおける算数、初等教育プログラムにおける理科、初等教育プログラムにおける言語、PYP における体育の重要性、初等教育プログラムにおける芸術、IB 教育の「学習者像」と教育要領「10 の姿」の比較。「PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラム」を基に比較検討を行う。

キーワード：国際バカロレア教育、PYP カリキュラム、SDGs

Key words：International Baccalaureate, PYP Curriculum, SDGs

はじめに

聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科では、国際バカロレア (International Baccalaureate ; 以降 IB と表記する) 教員認定資格 = IB Educator Certificate (IBEC)、初等教育 - Primary Years Programme (以下 PYP) に焦点を当てたコースを 2021 年 9 月から開始する予定である。それに向けて、本学の IBEC コースの具体的な中身の検討を行うため、学科の各教員が専門や関心領域と関連づけて研究・研修を行っている。今回は紀要としてまとめる中、IB・PYP 教育に関するさらなる理解や洞察を深めたいと考えた。「PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラム」¹⁾ を基にして考察を行う。各執筆者が独立した形でセクションごとに記述する。

1. 聖書・キリスト教的価値観と国際バカロレア

本学はキリスト教主義の学校であり、「生命の尊厳」と「隣人愛」を教育理念としている。IB 教育を導入するに当たり、聖書・キリスト教的価値観と IB の関連性について理解したことを以下に記す。

国際バカロレア教育 (IB) が目指すところは、グローバルな視野をもつ人間の育成である。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間の育ちである。こうした学習者像は、混迷・危機的な状況にある人類・世界を変革する人財、貢献する者となることへの期待が含まれている。これらは聖書が語るところと共通している。

マタイによる福音書 28 章では、世界を変革するあらゆる働きに向けてのイエスの派遣の言葉が示されている。神が与えている使命 (ミッション) は、祈りのうちに、神ご自身の力を受けて、世界の痛みや戸惑いを共に担うことである。弱者、傷ついた者、貧しい者たちのために心を砕き、世話をし、権利を養護することであると神学者 N・T・ライト (Nicolas T. Wright) は説明している。²⁾

IB においては、学びとは他者との関わり・コミュニケーションを通して獲得すると捉えている。学習は個人の頭の中でなされるのではなく、実生活との関連の中で、活動の参加者間のやりとり、共有・共感を通して行われるものとしている。学びとは知識や能力の量が增大ではなく、全人格的な変化・変容だと考えているからである。人間は生涯学び続ける、共に成長し続ける存在という考えが基盤にある。聖書は「真の知識」と「識別力」を身に付け、高い水準の愛を実践する者へと成長し続けることを奨励している。(フィリピの信徒への手紙 1 章、エフェソの信徒への手紙 4 章など)

ボイヤー (Ernest L. Boyer) は国際バカロレア教育に大きな影響を与えた人物であるが、その教育論の根本には聖書的視点・価値観が窺える。ボイヤーは 20 世紀のアメリカ代表する教育者であり、カーター大統領政権下にて教育長官を務めた。キリスト教会の牧師というユニークな経歴を持つ。真理の追究こそが聖なるものへと繋がる。神が全ての真理と美の根源であるならば、科学、歴史、心理学、社会学、文学、芸術、哲学、政治学など全ての学問は神の創造の秩序を発見することであるとボイヤーは述べている³⁾。また、学んだことをどのように自分の生活・生き方と結びつけることを促している。それは互いに仕え合うこと・service へ

と導かれていくことを意味すると語っている。

IBにおいては、地球環境に対する責任という点で持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals=SDGs）を重要視している。SDGsは貧困や飢餓、気候変動、環境破壊など深刻な問題解決に向けて取り組みであるが、こうした危機的状況の根本的原因は、創造主と人類及び被造物全体の不調和（「罪」）であると聖書は言及している。そして調和に向けての関係回復が「救い」を意味している。また、人間には、自然をはじめ地球環境（被造世界）を管理、保護・保存する責務と権限があることを示している。（創世記1章において、神は人を園に住まわせ、耕し守るようと命じている。）

以上聖書・キリスト教的価値観と国際バカロレア教育の関連についての一部を記載したが、今後さらに日本を始め海外のキリスト教主義の学校におけるIBの実践について調査・研究を進めながらキリスト教教育とIBの共通性を見出して行きたい。

（執筆者：太田雅子）

2. SDGs との関連

(1) 初等教育における SDGs の位置づけ

現行の小学校学習指導要領⁴⁾で、これまではなかった前文が初めて加えられた。このことは、これからの小学校教育において極めて大きな意味がある。それはつまり、これからますます変動性・不確実性・複雑性・曖昧性が高まるVUCA時代を迎えるにあたり、単に知識や技術の習得レベルではない包括的な教育を展開し、次代を担う子どもたちを学校と社会で共同して育てていかねばならないからである。そしてまた、前文内に記された「持続可能な社会の創り手」という文言は、2030年に目標達成を

目指すSDGs（持続可能な開発目標）への意識を、どの小学校でもカリキュラムデザインと展開の中軸に据えるということの意味するものであり、最も注目される点である。

このようなSDGsを軸としたカリキュラムのデザイン・展開は、国際バカロレア教育（以後IB）におけるPYPカリキュラムと齟齬を来すものではなく、非常に親和性が高く共通したものと考えられる。

(2) IBの学習像とSDGs

SDGsは17のグローバル目標と169のターゲットにより構成されており、大きくは貧困と環境・人権に関わるものである。「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」には、「学習が『児童にとって本当の』世界に即したものであるとき、そして教科の枠をこえた学習であるときに、最も効果的な学びが行われる」とPYPにおける学習のあり方を端的に示している。

言うまでもなく、SDGsは全ての目標やターゲットが統合的で不可分のものであり、これを既存の教科枠のみで捉えた場合、捨象される部分が多くなる。「総合的な学習の時間」ですでに実践されているように、教科・領域を総合的かつ横断的にしたカリキュラムのデザイン・展開が求められるのである。「児童にとって本当の」世界に即した学習の展開は、まさに児童の生活そのものであり、そうやってこそはじめて「主体的・対話的で深い学び」が実現されたものとなろう。

(3) IBと「生活即学習」「学習即生活」の理念

大正時代に奈良女子大学附属小学校で「合科学習」を提唱した木下竹二⁵⁾は、「生活即学習」「学習即生活」を教育実践の基本とした。以来、日本の総合学習の基本的な理念として今日まで継承されてきた。しかし、2000年以降の「ゆ

とり教育批判」「分数ができない大学生批判」に端を発した学力低下への懸念は、そうした理念とは相反した形で均一的な学力重視へと向かわせるものとなった。

パンデミックがきっかけになったことは皮肉なことであるが、ここに来て国際教育・グローバル教育、またICT教育などの重要性が改めて叫ばれることとなり、GIGA スクール構想は前倒しで実現するものとなった。

このように見てくると、教育における「不易と流行」が論じられるのは常のことであるが、国際教育・グローバル教育・ICT教育を単に「流行」と捉えることなく、その真なるところには日本の初等教育がずっと大切にしてきた「不易」の部分があることを忘れずにいたい。

IB PYP カリキュラムの実践は学ぶところ大であると同時に、そのような観点から日本の初等教育史の「合科学習」が起源の一つである「総合的な学習の時間」の延長線上に違和感なく根差しうるものであると捉えておきたい。何も全く新しいことに取り組むものではないのである。

(4) IN - ABOUT - FOR による学習の展開

SDGs に関連して、「総合的な学習の時間」の中で環境教育が取り込まれることは多い。この環境教育では、しばしば「IN Nature - ABOUT Nature - FOR Nature」と段階で学習活動が構想されてきた。つまり、「自然の中に存分に入りきる - 自然について学ぶ - 自然のために行動する」ということとなる。これは、何も環境教育に限ったことではなく、「IN Global - ABOUT Global - FOR Global」のように国際グローバル教育についても同様に考えることができる。

我々がこれから IB PYP カリキュラムのデザイン・展開に取り組むに当たり、体験を重視し、

問いを自らで形成し、様々な解決行動を展開し、探究し、自力で答えを導き出すといった学習が望まれる。それは正にグローバルな視点で思考し、ローカルな場で具体的に行動するというものになっていくだろう。太田堯⁶⁾が重視したように、我々は「問いと答えの間」、つまりプロセスを何より大切にしたい教育を展開したい。正に IB の学習者像と合致するものと言えるのである。

(執筆：鈴木光男)

3. 初等教育プログラムにおける算数

(1) PYP における問いの重要性の指摘と問い方

PYP を具現するには、PYP を理解し、それを具体的な授業で実践する教員の育成が欠かせない。本学こども教育福祉学科小学校教諭教職課程は2年目を迎え授業づくりに直結する算数科指導法をはじめとした教科指導法がスタートした。

授業づくりに関して「PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」¹⁾は、「『重要な問い』、そしてそれに関連する概念が、PYP カリキュラムを推進するといえる」(p20)と記述し、問いの重要性を指摘する。

算数科では、「重要概念を表す問いの例」として概念ごと一覧表にまとめている (p101)。以下の概念と問い方である。

特徴：それはどのようなものか

機能：それはどのような働きをするのか

原因：それはなぜそうなのか

変化：それはどのように変わっているのか

つながり：それは他のものとのようにつながっているのか

ものの見方：それはどのような観点があるか

責任：私たちにはどんな責任があるのか

振り返り：私たちはどのように知るのか

そして、これらオープンエンド型の問いは、「探究主体のプログラムには欠かせないもの」と強調する。

（2）算数科指導法における問いの重要性の指摘と問い方

本学こども教育福祉学科2年生を対象にした算数科指導法は、小学校学習指導要領算数編の理解及び全国学力学習状況調査問題でのつまづき分析とその対策を履修した後に、模擬授業を行った。模擬授業は、小学校教諭の資格取得を目指す20人が3グループに分かれ、20分間の模擬授業と、その後の10分間の授業検討会によって知見を見出すことを実施した。さらに見出した知見を次の授業者が活用することで知見の適否の検証と修正を行うことで授業力を高めるプロセスとした。

問いに関する事例を以下に紹介する。

事例：1年「数と計算」領域

1年「数と計算」領域の授業者から『「 $2+3$ と $3+2$ は、同じ？」という疑問に答えることができなかった。このような場合は、どうすればよいか?』と検討課題が挙げられた。

児童の疑問にどう対応するかという問題である。「児童の疑問を教師が答えるべきか?」と投げ掛けた。

その結果、せっかくの疑問をその児童だけの問題に止めるよりも全体で考えた方が、児童が思考すると意見がまとまった。具体的には、この場合は、教師が答えず、児童に「Aさんの疑問を考えてみよう。 $2+3$ と $3+2$ は、同じ?」と問いを投げ掛ければ、同じか違うかで検討が始まる。それまでのブロックを使った学習で学んだ「合併」と「増加」の動きを示す児童が表われる。手で動きを確認すれば、合併では同じ、

増加では違うと児童から意見が出るのではない。疑問を全体へ「問い返す」ことで広げることが効果は大きいと知ったのである。

疑問を出した学生は、授業後、次のコメントを書いた。

S1：質問は、先生が答えなければいけないという固定観念が自分の中にあったが、児童で考えさせてもいいんだと知った。保育でも自分が困ったら児童に「どうしたらいいと思う?」と聞くのもありと習ったので同じことだと思った。このような教師のかかわりが児童の主体性を高めることにも繋がると考えた。

別の学生からも次のコメントが続いた。

S2：わからないことを児童同士で話し合う活動というのはとても効果的で、算数の授業だけでなく、生活していく上でも大切であると思った。

S3：全部先生が解決しようとするのではなく、その問題を違う児童に『どう思う?』と問い掛けてみると、その学びがみんなに行き渡って深い学びになり、より双方向の授業になると知ったので、自分もこれからそうしていきたいと思う。

授業後のコメントには、保育指導と関連付けたり、算数だけでなく授業づくり一般に活用できるよさを感じたりしたことが伺われた。

（3）PYPのオープンエンド型の問いと算数科指導法で見出した全体へ返す問い

授業検討会で見出した知見「児童からの疑問は全体へ返す」は、次回以降の授業で活用することで授業での対応力を高めることにつながっている。児童同士でも、一人の児童の疑問が学級全体の疑問として広く取り上げられることで、思考が促され、より深い理解へとつながるのである。今回事例で紹介した「 $2+3$ と $3+2$ は、同じ?」は、PYPの問い方で言えば、「つ

ながら」概念の問い方の一例である。別の概念の問い方をすれば、学習者の思考はその概念把握に向かうことが予想される。

問いによって思考が促されことは、学習指導要領が意図する資質・能力の育成に関連させると次の知見が表れる。それは、どの箇所を問い返すかによって、どの資質・能力につながるのかを指摘できるのである。次のものである。

問い返し方 → 促される資質・能力
ア どう思う？ どう考える？ → 思考
イ どちらだと思う？ → 思考+判断
ウ 決まったら伝えてね → 思考+判断+表現
エ どうする？ → 思考+行動

今後も、「問い」に焦点を当てることで、PYPのよさを教科指導法に取り入れ、探究力のある学習者を育成できる教員育成に取り組んでいきたい。

(執筆者：飯田真也)

4. 初等教育プログラムにおける理科

(1) PYPでの教科等横断的授業づくりの重要性

PYPにおける理科は、教科の枠を超えた教科等横断的授業が特色である。「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」¹⁾ — 『初等教育プログラムにおける理科』は、教科等横断的発想の重要性を11箇所を繰り返し強調する。一覧表(p109)を除いた記載である。

「探究プログラム」(POI)における理科の役割(p108)での記載

- ① 児童に関連のある内容を探究し、従来の教科の領域を越えるという文脈の中で理科を学習すること。
- ② 理科の学習は教科の枠をこえたテーマすべてに関連している。

- ③ 理科の知識とその応用により、教科の枠をこえたテーマによって定義された中心的アイデアの探究が高まる。

「理科の知識とスキル」(p110)での記載

- ④ PYPの理科の分野は、理科とその応用を含んでいます。
- ⑤ 学習要素に加えて、児童は投げかけられた質問と探究を導く概念とを結びつけることにより「広い概念」を認識し、振り返りを行います。
- ⑥ 学習要素には固定された境界がありません。つまり、多くの分野はお互いに、また、算数、社会、体育(身体、人格、社会性の発達)など他の教科と重なり合う部分必ずあります。
- ⑦ 教科が他の教科とお互いに、また他の教科の枠をこえたテーマともつながっているという性質を理解するために、児童はカリキュラムの他の分野との必然的なつながりを意識しなければなりません。

「PYPの『重要概念』：理科に関して、私たちは児童に何を理解してほしいのか」(p113)での記載

- ⑧ 包括的概念または主要概念ごとに効果的にグループ分けできる「重要概念」の集まりが存在しそれぞれが時間や場所、教科の内外を問わず重要性をもっています。

なお、教科等横断的授業については、『小学校学習指導要領』⁴⁾「第1章総則 第2教育課程の編成 2教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」(2018)に記載されている。詳しくは、「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科横断的な視点で育成していく」である。これらは、教科等の特質を生かしながら教科等横断的な視点をもつ

て資質・能力を育成することが重要である、とまとめることができる。

両者の教科等横断的な授業・教育課程の記載を比べてみれば、PYPの方が教科等の枠よりも、テーマや「重要概念」の方をより重視していると言える。

(2) 大学での理科授業における教科等横断的授業づくりの重要性

本学小学校教諭教職課程において本年度開講した「理科」授業における教科等横断的授業事例を紹介する。「理科」は、教科自体の理解や理科を構成する領域や概念を体系的に理解することを目標とした。併せて重要概念を活用して現象を解説することを目標に加えた。

事例1：「てこの原理」の活用→体育

- ①見た目が変わらない2つのダブルクリップ（一方はPLUS社製エアかる）の力の入れ具合の違いが「てこの原理」にあることを確認した。
- ②「てこの原理」がどのような道具に活用されているかを確認した。「実験用てこ」のストッパーが外れたらどんな動きをするかを想像させ、回転するてこ「輪軸」へと「てこの原理」を拡大した。自転車・変速機・歯車など道具に回転する物があれば、「てこの原理」である支点からの距離と力の大きさの関係が成り立っていることを確認した。
- ③小学校体育鉄棒運動で腕立て後転はできるが、腕立て前転ができない児童にどんな声掛けをしたらよいかを考えさせた。「てこの原理」を活用する内容を含む「どこで脚を縮めればよいか」等の発問をすればよいことを確認した。併せて脚の伸縮による「位置エネルギー」と「運動エネルギー」との転化を繰り返せば連続技になることを確認した。

学生から次のコメントが挙がった。

S1：輪軸の話聞いた時すごく納得できた。

これは比較や関係付けをしっかりと行ったからだと思った。

S2：「てこの原理」で多面的・多角的に道具を見られるようになった。

S3：「てこの原理」の鉄棒への応用がものの見方を最も変化させた。

理科の考え方「比較」「関係付け」を使って理解を深め、「てこの原理」を多面的・多角的視点にして物や現象を把握していることが伺われた。授業後の受講学生20人の平均自己評価では、5段階評価で「学び度：4.4」「変化度：4.1」と最大値に対して8割を超える評価であった。

事例2：「月の形」→社会・国語

- ①太陽、地球、月の位置関係で「月の形」が変わることを確認した。
 - ②「本能寺の変」等の「月の形」を確認し、月日と月の形がほぼ一致していた旧暦を知った。歴史的事件時の情景を想像した。
 - ③「五月雨を集めて早し最上川」などの俳句季語や、年賀状に「迎春」等と書く季節感のずれを確認した。
- ②③は、授業の本筋ではなかったが、次のコメントがあった。

S4：旧暦から新暦になったことで季節感がずれたという話があり、なるほどなあと思った。調べてみると旧暦では閏月があり1年が13ヶ月ある月があったらしい。明治政府の歴史上の背景と理科や生活が結び付いていると思うと面白いなあと思った。

「月の形」を基にした旧暦が日本の生活や文化に根を下ろしている事実や、月の明暗と歴史的事件との関係は、学生の興味を喚起し、自ら調べ学習へと導く機会となったのである。

(3) 教科等横断的授業づくりの効果

ある要因が「生態ピラミッド」を変化させる等の「生態学的見方」を活用して社会現象を解説する課題を出した。具体的には、「教職研修」—『ポストコロナの学校を描く：社会は『一律』から『個人』の時代へ（藤原和博）』⁷⁾に対する意見文を書く課題である。

結果は、藤原氏の意見を「確かに」と肯定しつつ、「しかし」と反対意見を続け、最終的な自分の意見を書く学生が半数を超えていた。次の意見文のように、他者の意見に対して安易に同調するのではなく、デメリットを挙げることで比較を通して思考を深めていたのである。

わたしは反対だ。今の日本では「みんなと同じ」という事にすごく固執している。そんな現在の一律という概念から個人の時代になったら、文にもあったように、人に埋もれる事なく生み出すコンテンツの価値や思考力や判断力、表現力があからさまになる。また個人でもっと意志を持つようになって人生観や世界観を編集できるようになるのは確かになると思う。しかし、こういった意志を表現するのは集団の中でもできる事ではないかと考える。また、個人だけに特化してしまったら、どう勉強したらいいか分からない為に何も出来ずに終わってしまったり、閉じこもってしまったりする子は、コミュニケーション能力も低下するといった短所も出てくる。

「個人の時代になれば、もっと一人ひとりを尊重出来るし、個性を光らせる事が出来るのではないか？」という意見もあると思う。だがそれは、集団の中でも一人ずつにもっとフォーカスして時間を取ったり、もっと周りを気にせず自己を主張する力を身につけたりしたらある程度はできることなのではないかと考えた。

以上より、わたしは個人に特化して考えすぎ

る必要は無いのではないかと思います。時代を考えるのは難しいのだから、「集団の中で個人の特色をどう出すのか？」というのを考えてみるといいと感じる。

「生態ピラミッド」のある層が変化したら別の層に影響を与え思わぬ結果が出現する過程を学習した学生は、この見方を利用して「個人」の特化を進めるとどんな事態が発生するかを思考していた。その結果、「集団の中で個人の特色をどう出すのか」へと思考を深め、2者択一ではない新たな課題を見いだしたことが伺われたのである。

このような事例は、PYPが指摘する「重要概念」を理科の枠に止めるのではなく、境界を設けずに他教科・他領域へと活用することで、新たな課題を発見し、次への探究へと進むことが示唆されるのである。

(執筆：飯田真也)

5. 初等教育プログラムにおける言語

(1) 言語における信念

IBでは、言語教育をどのように位置づけているのか。「PYPのつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」¹⁾を通して、まとめてみたい。

言語の学習プロセスには、「言語の学習」、「言語についての学習」、「言語を通しての学習」が同時に関与する。これら3つの要素は密接に結びついており、個別のプロセスとは考えづらい。しかし、日本の国語教育でも既知的知識ではあるが、個別的に取り扱われていることが多い。

PYPにおける言語教育は、慣習的な言語伝達モデルに基づくものではなく、学習者の過去の経験、ニーズや興味に応えるために、意味のある文脈の中で学習に取り組む機会を与えるも

のである。その機会の多くは、言語習得の場ではなく、探求プログラムに存在する。なぜなら、言語は探究の手段であるからだ。探究とは、探索したり、疑問に思ったり、質問などで行われる。また、調査し、情報を収集し分析することもある。つまり、PYPの言語教育は環境との積極的な関わりという直接体験の中で行われているということだ。これが意味のある文脈の中での学習、言語の学習プロセスの3つの要素を統合させる推進力となる。

(2) 「探求プログラム」における言語の役割

PYPの「知識」の分野では、言語はカリキュラム全体を結びつける上で最も重要な要素としている。カリキュラムのすべての領域で言語指導と言語学習に対する生きた文脈を提供するからだ。この文脈は、「学び合う者たちのコミュニティー」と「探求プログラム」を支える教育理論の高い関連性がもたらす。そのためには、学習者に自分たちの役割を協議する機会を保障しなければならない。また、「探究の単元」に関連した生きた文脈の中で活動させなければならない。さらに、探究を目的あるものにする事で、文脈は楽しいものとなり、言語能力を伸ばすことを可能とする。

「探求プログラム」における言語の役割は、学びの保障と、保障された学びからの言語獲得への原動力と考えられる。

(3) 言語の学習要素について

PYPでは、言語を口語言語、視覚言語、書記言語という3つの学習要素に分け、言語学習の必須成分として位置付けている。またそれぞれの学習要素は、意味を受け止める受容的側面と、意味を創造し共有する発信的側面から考察される。これらの考察は、バランスの取れたプログラムを提供することとなり、学習者の言語能力向上を容易いものとする。

口語言語とは、「聞くことと話すこと」である。先のバランスの取れたプログラムの提供は、学習者を聞き手（受容モード）及び話し手（発信モード）として参加させ、言語を能動的かつ意識的な注意から理解し、意味を構築・再構築しつつ考えを明確に述べる力を育てる。

視覚言語とは、「見ることと発表すること」である。このプログラムは、視覚テキスト（パンフレット、ウェブサイト等）の解釈・使用・制作が含まれ、学習者は、考え・価値観・信念を伝えるためにイメージと言語がどのような相互作用が見られるかについてまでも理解することができる。

書記言語は、「読むこと」、「書くこと」である。「読むこと」とは、文章から意味を構築することであり、読むことに対する目的、事前の知識と経験及び文章自体が関与する。つまり、良い書物を与えれば、意味を構築していく力、感情、思考の明確化が図れるということである。「書くこと」とは、自分を表現することである。表現とは、個人的行為であり、意味や意図を伝えることである。書き手は自分のメッセージの共有を強く他者に求めるとき、書くことの構成、戦略、文学的テクニックが発展していく。つまり、書くことによって書くことを学ぶということになる。

PYPの言語教育は、日本の教育、「主体的対話的で深い学び」という文脈に通じるものと考えられる。

(4) まとめて的に— PYPの「重要概念」とは

PYPの理念には、「目的をもった体系的な探究は学習の意味や理解を深める有効な手段であり、重要な意味のある概念に取り組む」ことが中核に存在する。そのために「概念に基づくカリキュラム」に取り組んでいる。包括的概念または主要概念には、効果的なグループ分けがで

きる「重要概念」の集まりが存在し、時と場、教科内外を問わず重要性をもつ。この「重要概念」の集まりがPYPカリキュラムの中心的存在となり、教師や児童による探究を導く効果的なカリキュラムの構成となる。「重要概念」には、「特徴」「機能」「原因」「変化」「つながり」「ものの見方」「責任」「ふりかえり」の7点があげられている。この概念を基にした問いは、オープンエンド型となり、方向性や目的のある単元が具現化されると言う。「学習者の過去の経験、ニーズや興味に応えるための、意味のある文脈の中で学習に取り組む機会を与える」ことであり、言語の学習プログラムを推進する力といえるであろう。

(執筆者：福重浩之)

6.PYPにおける体育の重要性

PYPにおける体育は、「人格的、社会的、身体的な健康と発達」(Personal, Social and Physical Education : PSPE) とされ、「健康に影響を与える概念、知識、姿勢、スキルの促進と発達を通して、人の健康と幸福について考える学習」であり、「自分を理解し、他人との関係を構築、維持し、活動的で健康なライフスタイルを送れる」よう促す¹⁾。

日本では1980年代が子どもの体力のピークであったとされ、2000年頃まで低下し、その後はほぼ横ばい傾向にある。経済成長後の1980年代以降の日本では、塾や習い事の時間の増加やメディア接触時間の増加による遊び時間の減少、都市の過密化による遊び場の減少、少子化による遊ぶ仲間の減少という「時間・空間・仲間」の減少を背景として、外あそび時間、身体を動かして遊ぶ時間が減少し、子どもの体力が低下した。また、家電や自家用車が普及し、

生活が便利になったことで、生活の中で身体を動かす機会も減少した。

心身の健康な発達という視点から見れば、現代社会(情報社会 Society4.0)は、身体的には運動する機会を奪い、精神的には多くのストレスを作り出し、社会的には対面でコミュニケーションする機会を奪っており、健康な生活を送ることが難しくなっているともいえる。

そして、そのような傾向は、IoTやAIが発達する超スマート社会 Society5.0においては、努めて意識しなければより進行していくと考えられる。だからこそ、基本的な生活習慣を身につける幼児期から児童期に「人の健康と幸福について考える学習」を通して「活動的で健康なライフスタイル」を自ら選べるように学び続ける姿勢を身につける必要がある。

健康の基本となる生活リズム(早寝早起き)は、農耕社会 Society2.0では日の出、日の入りに合わせた生活が、工業社会 Society3.0では工場の稼働時間に伴う労働時間に合わせた生活が基盤となった。超スマート社会 Society5.0では、より人間が身体を使ってしなければならない仕事が減り、世界中が常にリアルタイムでつながり、いつでも情報がやり取りできるようになるからこそ、個々が自らの健康のために睡眠や食事や運動の時間と質を確保できるよう努める必要がある。スクリーンの前であらゆることができるからこそ、動物としての人間の欲求を保障し、身体的に健康であるために、自ら運動する意識と習慣を身につける必要がある。

子どもが自身の健康を保ち、また生涯学び続ける学習者となるような理解を構築するために、PSPEにおける探究の役割は重要であり、目的をもった探究は子どもにとって最適な学習方法と考えられ、すべての学習は、必ず子どもが以前および現在理解しているところから始め

るとされる。

例えば、生活リズムの重要性について学ぶとき、教師からその重要性についての説明を受けるのではなく、まず自分が生活リズムについて何を知っているのか、自分の生活リズムの現状はどうか把握し、自らの課題を設定して、その課題の解決を考えていく。保護者の意識も高く、既にその重要性について理解し、生活リズムが整っている子どももいれば、そうでない子どももいる。朝食を家族でそろって食べている子どももいれば、朝食を用意してもらえない子どももいる。毎日決まった時間に寝て睡眠時間を確保できている子どももいれば、夜遅くまでゲームをしている子どももいる。そのような中で各々が自らの現状を把握し、自らの課題を設定して、解決を考えていく。課題は一人一人異なるが、仲間と学び合い、より深く探求していくことを通して、自分自身の人格的、社会的、身体的な健康の発達について考え、状況の変化と困難な状況に対処する方法を身につけ、応用し、個人目標の達成に向けて取り組む。その探求のプロセスを通して、生涯にわたって「活動的で健康なライフスタイル」を自ら選択するようになる。

例えば、自らの興味に基づき選択したスポーツに参加し学ぶとき、教師が考えた指導計画に基づき練習しそのスポーツに関する知識やスキルを学習するのではなく、何ができるか、何をしたいか、どんな練習をすればうまくできるかを仲間との練習や作戦会議や振り返りを通して探求し、個人やチームの成績を高める方法を身につけ、グループやチームの一員として機能するために協力的な行動をすることを学び、あらゆる場面で活用できる社会性を身につけていく。

このように、PSPEは「社会的、個人的な課

題に対処するモデルやプロセス、語彙を提供し、健康と幸福を実現」する。子どもは、「困難に立ち向かい、健康的なライフスタイルを選択し、責任ある、尊重される社会の一員としての役割を果たすために、肯定的な姿勢や行動」を身につける。¹⁾

IBの使命である「より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探求心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」のためには、その基盤となる「健康でバランスの取れたライフスタイル」が必須であり、PSPEはその学習を担っている。

（執筆者：和久田佳代）

7. 初等教育プログラムにおける芸術

「PYPのつくり方—初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」¹⁾では「芸術は、児童が自我を探求、確立する強力なコミュニケーション方法であり、まわりの世界に対する理解を深める。」「芸術についての学習はすべての子どもの発達の基本であり、想像力、批判的思考、問題解決スキル、社会的交流を促進する。」と記されており、PYPでは芸術を学習する事を重要視している。

また、PYPの「芸術」とは、ダンス、演劇、音楽、美術と定義されており、それらは単独もしくは教科の枠を超えてカリキュラム全体にわたり関連づけられて学ぶという特徴がある。そして、児童たちは急速に変化するデジタル時代に対応し、新しいメディア・ツールをクリエイティブに使う方法を探求する事も芸術の学習の中で求められている。PYPにおける芸術は、児童たちが探求学習を通してダンス、演劇、音楽、美術、メディアなどを多角的に捉えながら革新的、創造的な学びを展開していく。

(2) 初等教育プログラム (PYP) における音楽の学びについて

PYP の音楽の学習は、毎日の生活の一部として捉えることができ、学習を通して聴くスキルの発達や言語の発達などを助長するとも言われている。得に IB 教師は「言語プロセスにおいて重要な役割を果たすことを認識しなければならない」としており、言語学習との結びつきを強く意識して音楽の学習を展開することが求められている。音楽の三要素はリズム、ハーモニー、メロディーとされており教師はこの要素を意識しながら授業を展開している。言語についてであるが、世界中に様々な言葉が存在しており、それらは抑揚など様々な形でリズムが存在する。音楽と言語は「リズム」が共通しており、PYP では両者を意識しながら強化の枠を超えた横断的な学びを展開することが肝要とされている。

また、PYP の音楽の学習では知識と体験を結びつけながら「創作」と「鑑賞」に大別し世界の様々な音楽スタイルを探求型で学ぶ事ができる。例えば、歌唱、音の識別、作曲、楽器の演奏、記譜法、作詞作曲、録音、ミュージカルなど多岐に渡る学習内容を児童は学び、想像力を膨らませ音楽体験を通して表現力を身につけていくことが期待されている。そして、それらの学習では文学、歴史、ダンスなどと結びつけながら総合的に学習を展開できる汎用性のある教育プログラムである事が特徴と言えよう。

(3) 国内における PYP プログラムの音楽に関する研究動向と今後の課題

日本国内における国際バカロレアは普及段階にあり PYP の音楽に関する研究は発展途上である。日本国内においてメジャーな論文検索サイト「CiNii Articles」に「国際バカロレア 音楽」と入力すると 15 件の研究報告が掲

載されている (2021 年 1 月 6 日現在)。中には MYP の報告も含むため純粋に PYP の音楽に関する研究は数件程度に留まっている。教育カリキュラムを概観したものや、音楽授業のモデルプランの試案の報告などである。今後の課題は PYP の音楽実践についての調査が喫緊の課題であるため、調査に着手したい。

(執筆者：二宮貴之)

8. IB 教育の「学習者像」と教育要領「10の姿」の比較

IB 教育の「学習者像」と日本の幼児教育の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(「10の姿」)を比較し、両者の本質的な差異を浮き彫りにする。この比較・検討を通して、日本の幼児教育の課題を示したい。

最初に、IB 教育の「学習者像」と「幼稚園

表 1 : 「学習者像」と「10の姿」の比較

IB の「学習者像」	教育要領の「10の姿」
探求する人	健康な心と体
知識のある人	自立心
考える人	協同性
コミュニケーションができる人	道徳性・規範意識の芽生え
信念をもつ人	社会生活との関わり
心を開く人	思考力の芽生え
思いやりのある人	自然との関わり・生命尊重
挑戦する人	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
バランスのとれた人	言葉による伝え合い
振り返りができる人	豊かな感性と表現

教育要領」等に示された「10の姿」を表にまとめておこう（表1）。

表1からわかるように、項目数はどちらも10項目である。しかし、内容はかなり異なる。その差異に注目することで、それぞれの教育の特徴を浮き彫りにしよう。紙幅に限りがあるため、ここでは1つの重要な差異だけに注目する。

その重要な差異とは、各項目を記述する際の「動詞 vs. 名詞」の差異である。IBの「学習者像」が「動詞」を中心に描き出されているのに対し、教育要領の「10の姿」は「名詞」を中心に描き出されている。この「動詞 vs. 名詞」の差異がどのような意味をもつのか、以下で丁寧に見ていこう。

IBの「学習者像」はすべての項目が「動詞+人」という形で表現されている。これは原語では、「探求する人 (Inquirer)」や「振り返りができる人 (Reflective)」のように、学びのプロセスに関わる10個の行動を表す動詞の主体を示す名詞化や形容詞化である。このような表現によって、IB教育は学びの主体が子ども自身であることを示し、そうした学びのプロセスを生み出す子どもの主体的行動そのものに焦点を合わせていると言えよう。

それとは対照的に、日本の幼児教育の「10の姿」は2種類の「名詞」を中心に描かれている。1つは、「自立心」「道徳性」「思考力」など、心の性質を実体化した抽象的な「名詞」であり、もう1つは、「社会生活」「自然」「数量・文字」など、子どもが関わる対象を示す「名詞」である。IB教育の「学習者像」では中心的な役割を果たしている「動詞」は各項目の説明には登場するものの、リストの表には出てこない。そのため、「10の姿」を読んでも生き生きと主体的に学ぶ子どもの姿は見えてこない。しかも、「10の姿」の各項目の説明の中に登場する動詞

のうち、最も多く使われている動詞は「～をもつ」であり、その重点はやはり「何を」もつのかという「名詞」にある。

「10の姿」が導入された平成29年の教育要領等の改訂のポイントは「コンテンツ・ベースの教育」から「コンピテンシー・ベースの教育」への転換にあると言われている。そして、その転換に際して、幼児期の終わりの段階、すなわち小学校への接続期において、どのような資質・能力が育ち、それがどのような姿となって現れているかを示す役割を期待されて作られたこの「10の姿」はまさにその要の一つになるはずである。

しかし、ここでの検討から明らかのように、その具体的な中身はこのように「名詞」に重きを置きつつ記述されている。つまり、これを見る限り、日本の教育はまだ大人の目線から「何を教えるか」「何と関わりをもたせるか」といった「コンテンツ」に重点を置いた旧態依然とした枠組みの中で子どもを見ることから完全に脱却できていない。しかも、その教育の成果としての子どもの姿は、観察できる具体的な行動の詳細によって記述されるのではなく、子どもの中に仮構された様々な心の性質の発現として記述されている。その記述を見ると、これらの仮構された心の性質を表す名詞は、戦時中の教育で謳われた「大和魂」と同じように、その中に大人が「育ってほしい」と願っている様々な姿を都合よく詰め込むことのできる「空虚な記号」として機能している。それに対して、IB教育のプログラムのまなざしは、子どもの主体的な学びの行動に焦点を合わせているだけでなく、その主体的な行動をどのように援助していくかについての方法論を、カリキュラム全体を通して体系的に記述している。日本の教育はこうしたIB教育の体系に学ぶ必要があるだろう。

（執筆者：細田直哉）

おわりに

IB が提示する教育理念や方法、カリキュラム、評価方法は現行の幼稚園教育要領・学習指導要領が求めている学習と共通している点多々ある。今後もそれらを丁寧に洗い出し、各授業科目（主に教職課程）において意識的に取り上げることが必要であろう。そうすることで、IBEC プログラムがより優れた内容になることが期待される。同時に IBEC での学修を IB 校以外の教育においても活用でき、グローバルな人財育成のための教員・保育者養成に繋がるであろうと考える。

引用文献

- 1) 国際バカロレア機構 (2016) PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み . www.ibo.org

参考文献

- 2) N.T. ライト (2018) 驚くべき希望 . あめんどう
- 3) John Fea (2020) Teaching Ernest L. Boyer's Vision for Messiah College. The way of improvement leads home, Feb.13. <https://thewayofimprovement.com/>
- 4) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領
- 5) 木下竹次 (1972) 学習原論：世界教育学選集 . 明治図書
- 6) 太田堯 (2013) 生きることは学ぶこと - 教育はアート：太田堯自撰集成 1 藤原書店
- 7) 藤原和博 (2020) ポストコロナの学校を描く：社会は『一律』から『個人』の時代へ . 教職研修 (8月号) . 教育開発研究所